

愛媛県は、前に述べたように新居浜を中心に銅の遺産群が佐田岬半島までずっと続いています。また青石を使ったいろいろな構造物が見事に残っています。石灰窯を含め、愛媛には群として残っている遺産がたくさんありますので、こういうものを軸にしながらストーリーづくりができると思います。そして枝葉には、先ほど述べた徒歩めぐり・自転車めぐりのルートや、博物館・お土産物・食べ物屋などを入れ込んだシナリオができます。明浜には蜜を付けて食べる芋団子が昔あったということですが、地元と関係のある食べ物や名物・名産を含めて考えると、一般の人にとっても魅力的な地域になると思います。

多少繰り返しになりますが、愛媛にとって一番大きな起爆剤は、新居浜の別子銅山です。骨太の大きなストーリーづくりができます。遺産が群としてまとまって残っている地域で、しかも愛媛の地形まで説明できる。最近話題になっているジオパークと絡めて説明できますので、時代に即した形で展開できます。遺産的な建物を、やみくもに観光施設化するのは、個人的にはあまり賛同できないのですが、それでも観光客が来ないと維持管理費用は捻出できませんので、その辺はやむを得ないと腹をくくっています。地域の活性化と遺産にとって一番よいのは、本来の産業施設として使い続けていく産業観光であり、それが駄目なとき、次善の策として観光施設化を考えたらよいのではないかと思います。

産業遺産を利用した地域活性化にとって、これをすれば必ず成功するというプロトタイプや手法はありません。全国でそういったことを、関係者のみなさんは考えているのですが、地域や人に即した形で頑張るしか策はないと思います。チエを出し合い、工夫と試行錯誤を繰り返す中から、地域固有の活動形態が生まれてくると思います。愛媛にもそういった芽生えや活動している団体がいっぱいありますので、みなさん頑張ってください。私でもできることは応援したいと思います。

時間になりましたので、この辺で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

[平成25年12月17日(火)於:愛媛大学南加記念ホール]

Profile 伊東 孝 (いとう たかし)

産業考古学会会長
 日本大学理工学部非常勤講師、上席研究員
 工学博士
 1976年 東京大学大学院単位取得退学
 1978年 工学博士
 1996年 日本大学理工学部教授
 2011年 日本大学理工学部特任教授
 2013年から現職

著書 『東京の橋—水辺の都市景観』(鹿島出版)、日本文化デザイン賞
 『東京再発見—土木遺産は語る』『日本の近代化遺産』(岩波新書)
 『水の都、橋の都』(東京堂)
 『四谷見附橋物語—ネオ・バロックの灯』(共著、技報堂)、国際交通安全学会賞